

Live5

作曲講座

vol.6 エフェクト/ミキシング

DVDビデオで一目瞭然!



M-SWIFT松下山平がブラジリアン女性ボーカル曲を実際にLive5を使って制作!!
DVDオーディオに完成楽曲
「12Fingers M-SWIFT re-arrange」収録!

統合音楽ツールとしての完成度を格段に高め、音楽制作の中核をなすソフトへと進化した Ableton 社の DAW「Live5」。「録音 & 編集」「MIDI 打ち込み」「エフェクト & ミキシング」機能はもちろん、「VST と ReWire に対応」といった拡張性、スピーディな作業を可能にする「リアルタイム性の高い操作感」などなど、作曲 / パフォーマンスに不可欠な要素をもれなく網羅している。付録 DVD ビデオでは実際に曲を作りながら「Live5」の機能を紹介しているので、ぜひご覧いただきたい。

自由度の高いルーティング機能

前回までで、曲の打ち込みと楽器の録音を終了した。今回はいよいよ曲の仕上げであるトラック・ダウンを行なう。「Live5」には楽曲クオリティに大きく影響するこの重要な作業においても大きなアドバンテージがあり、付属のエフェクトやプラグインとしてリリースされる VST と Audio Units 形式のプラグイン・エフェクトを使用し、よりハイレベルな制作を行なえる。



写真1 柔軟なルーティング機能も魅力のひとつ。新たにトラックを立ち上げて「Impulse」の音をアサインする。

まずは「Live5」付属のドラム・サンプラー音源「Impulse」で打ち込んだビートに、付属のコンプレッサー、EQ、リバーブといったエフェクトをかける。「Live5」の特筆に価する部分のひとつに、エフェクト・ルーティングの自由度の高さが挙げられる。「Impulse」に打ち込まれた、キック、リムショット、ライド・シンバル、タムといったドラム・パーツそれぞれに、別々のエフェクトをかけていけるのである。

その準備としてそれぞれのパーツごとに新しくオーディオ・トラックを立ち上げ、その「Audio From」という部分の「Ext.in」に「Impulse」がアサインされたドラム・トラックを指定、さらに「Track Out」でキック、リムショット...といったドラムのパーツを指定し「Monitor」を「In」にする。このように別々にエフェクトをかけたいパーツごとに、新たにオーディオ・トラックを作るだけで簡単に音をルーティングさせられるので、直感的に作った打ち込みに対しても後で自由に音をコントロールできるのは何より嬉しい。

ビデオではもともと以前のバージョンから評判の良い Live の付属エフェクト、オグジュアリの使用例についても紹介しているので、ぜひご覧いただきたい。



写真2 さらに「Impulse」の各音をわけてアサインすることも可能。緻密なミキシングには欠かせない。



写真3 ハイクオリティなエフェクト。ビデオでは高度な使い方を紹介している。

連載予定

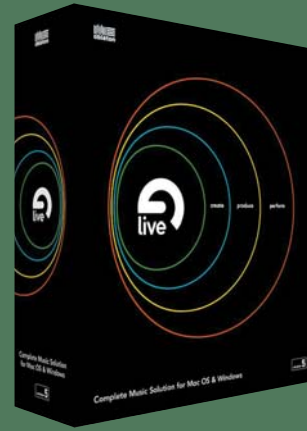
vol.1	Live5ってどんなソフト?	vol.4	ギターレコーディング
vol.2	ドラムの制作	vol.5	アレンジを詰める
vol.3	仮コード、ベース、歌入れ	vol.6	エフェクト/ミキシング



profile

M-SWIFT

松下昇平が率いるプロジェクト。ジャズ、ブラジリアン、アフリカ、キューバを通過したそのサウンドは、ディープ・ハウス、ブレイク・ビーツなどクラブ・フィールドのさまざまな音像を飲み込みながら、新たな領域へ発展している。現在、2ndシングル、1stアルバムを制作中。



ableton Live5

対応OS：Windows 2000 / XP、
Mac OSX 10.2以上・
10.4対応

価格：オープンブライス
(市場予想価格：
5万2,545円前後)

問い合わせ先：
(株)ハイ・リゾリューション
www.h-resolution.com



同一トラックの音量調節

ミキシングにおいて大事な作業に音量バランスの調節がある。個々の楽器のバランスを取る場合、大抵楽器はトラックごとに分かれているのでそのトラックのフェーダーを使えば良いし、ソフト音源によるドラムの場合は先程のようにトラックを分ければ良い。ただ、今回の楽曲のギターのように同じトラックに録音された楽器の場合、奏法により著しく音量が変わるものがある。「Live5」ではこのようなときでも、クリップをアルベジオ、ストロークといった部分ごとに分け一気に音量を調節できる。他のDAW同様に音量カーブを描いていくことも可能だが、クリップごとに調整するほうがはるかに作業が早いのだ。



写真4 ギターの奏法にしたがってクリップを分け、音量調節する。視覚的に把握できるので作業効率が高い。

高度な使い方と書き出し

ボーカルなどを扱う場合、ミキシング時に音程の補正を行ないたいときがある。もともとオーディオを柔軟に扱うという概念から出発したLiveは、このような場合にも大きな力を発揮する。ボーカルが多少フラットしている部分があるなら、クリップのその部分を拡大しセント単位で細かな調節ができるのである。また半音単位での調整もすぐに行なえるので、コーラス・パートを作ることもお手の物だ。

「Live5」には22個もの高品位オーディオ・エフェクトが付属するが、楽曲によってはより複雑なものが欲しくなることがあるかも

しれない。だが付属エフェクトを組み合わせることによってさらに高度な使い方が可能となる。ビデオでは複数のコンプを組み合わせバンドコンプを作り、マスターコンプ的の使い方を紹介している。組み合わせたエフェクトはグループ化して保存もできるので、他の楽曲でもオリジナル・エフェクトを使用できる。

トラック・ダウンが終わったら、いよいよファイルに書き出して完成となる。ソング中の書き出したい範囲を選択し、ファイル・メニューから「ディスクへの書出」を選び、オーディオ・ファイル設定、保存先指定を行なえばファイルが書き出される。

6回にわたるこの作曲講座はいかがだったろう。初/中級者はこれを見ることによってかなりのスキルアップが計れるし、上級者にも新たな発見があったことと思う。「Live5」の使い方はひとつではない。作り手に合わせて柔軟に対応してくれるソフトなので、使い込むことでより馴染んでくるはずだ。ぜひお楽しみいただきたい!



写真5 ピッチ補正も緻密かつ正確に行なえる。DAWにこの機能が含まれるのが大きなアドバンテージとなる。



写真6 いよいよ完成! 書き出したい部分を指定し、レンダリングを始めるよう。